

## 業務結果説明書

### 1. 業務の実績

#### (1) 業務の実施日程

業務項目	実施期間（平成28年9月14日 ～ 平成29年3月31日）									
	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
I. 地域の方言に関する諸資料の学習材化と記録保存が必要な方言に関する緊急調査	記録保存が必要な被災地方言の緊急調査、及び、学習材化が必要な方言資料に関する調査活動					1) CD『よみがえる三陸金浜のことば2 一昭和の方言談話資料一』作成 2) 冊子『よみがえる三陸金浜のことば2 一昭和の方言談話資料一』作成 3) 方言絵本『つまぶちのかっぱ 一絵本で語る栗林の昔話一』作成				
II. 昔話等の口承活動の支援を通じた地域方言による言語文化活動の活性化	1) 田老第一中学校方言劇「関口松太郎物語」の脚本方言訳支援(10月29日上演) 2) 南部弁を語る事業「はっちでずっばど南部弁」開催(12月3日・八戸市) 3) 釜石弁を語る事業「おらほ弁で昔話を語っぺし」開催(1月21日・釜石市) 4) 昔話を語り聞かせる事業「おらほ弁で語っぺし・小学校編」開催(11月30日・12月21日・1月10日・1月12日／白山小学校・栗林小学校・甲子学童育生クラブ・双葉学童育生クラブ) 5) 再委託事業「方言アフレコ教室 in 釜石小学校」開催(11月13日)									

## (2) 業務の実績の説明

東日本大震災に伴う大津波により激甚な人的被害を受けた岩手県沿岸部地域では、長年にわたる過疎化に加えて大規模自然災害をこうむったことにより、地域コミュニティ自体が危機に瀕しており、地域文化とアイデンティティーの拠り所としての伝統的方言も消滅の危機に瀕している。本プロジェクトは、このような状況に置かれた地域コミュニティを再興し、地域社会の活力を取り戻すために、地域固有の価値観や文化を反映した方言に着目し、方言を次世代に向けて継承する活動を支援することを通じて、地域の文化的復興を促進することを目的として取り組んだ。

具体的には、これまでの「被災地における方言の活性化支援事業」の成果をまとめた『方言を伝える—3.11 東日本大震災被災地における取り組み』（2015年6月・ひつじ書房刊）において呈示した次世代継承のための支援ステップ（記録保存・学習材化・方言使用の場の設定）に沿って、文書・音声媒体で記録保存し、次世代での地域文化復興のための学習材化を行うとともに、併せて地域方言が使用されるチャンネルである昔話・伝説や地域の生活伝承等の語りの活動の支援を行った。このような多面的な活動を通じて、おらほ弁（自分たちの言葉、地域方言）で語ることの総合的な支援を継続すると同時に、併せて、地域の言語文化を次世代に継承する活動を地域社会に根付かせ定着させることにより、地域文化のサステナビリティ（持続可能性）を次世代に向けて高めることを目指した取り組みを進めた。

### I. 地域の方言に関する諸資料の学習材化と記録保存が必要な方言に関する緊急調査

これまでの事業において収集された被災地（釜石市をはじめとする三陸沿岸部地域）の方言に関する諸資料（昔話の語り等の談話資料、方言に関する地域の記録類等）の学習材化を継続して進め、被災地をはじめとする関係機関に配布することにより、危機的状況に置かれていることが危惧される被災地の地域方言の再興と次世代への継承を促す学習材としての活用を可能とした。なお、併せて前年度までの収集資料の補完及び確認のための調査を遂行し、将来に向けて記録保存が必要な地域方言については可能な限り記録保存のための調査も行った。

#### 1) 『よみがえる三陸金浜のことば 2』CD及び冊子（解説）

方言が生き生きと使われていた昭和時代(1982年)に文化庁「各地方言蒐集緊急調査」により採録されたが、その後公開されることなく、地域の採録担当者（坂口忠氏）により私蔵されていた貴重な方言談話資料を発掘して、前年度にCD『よみがえる三陸金浜のことば』（音声CD及びデータCD）及び詳細な解説（資料の概要、金浜方言の特色、文字化・共通語訳）を加えた冊子（80頁）を刊行した。本年度は、前年度未収録の方言による貴重な昔話の語りを収録したCD『よみがえる三陸金浜のことば 2』及び詳細な解説を加えた冊子（92頁）を宮古市方言の学習材として作成した。宮古市金浜集落は宮古湾最奥部に位置するため、津波による激甚な被害により多くの犠牲者とともに集落の大半が流失している。なお、地域の協力者である坂口忠氏は、震災直後の2012年に『岩手県宮古市宮古ことばのおくら』（私家版777頁）を刊行しておられ、前年度と本年度刊行のCDと相互に補完して、地域の言葉を後世に伝える学習材として残すことができた。

発話者：長谷川ナヨ氏

作成者：竹田晃子、坂口忠

録音時間：約53分

収録内容： 01ならんなすの話、02狸汁と婆汁、03狐の釣りの話、04糠坊と林檎花の話、05屁たれ嫁の話、06みこしの化け物の話、07豆の話、08ばか婿さん

## 2) 方言絵本『つまぶちのかっぱ—絵本で語る栗林の昔話—』

昔話を方言で語り伝える活動をしている釜石「漁火の会」のメンバーである藤原マチ子さんと連携して、藤原さんの御子息が26年前の小学生時代に作成した鶴住居川の河童の話の絵本を、あらためて現代の小学生に呈示して地域のことばの魅力と言語伝承の面白さに触れてもらうためのツールとして、12ページから構成される簡便なパンフレットとして復元刊行した。

物語の舞台となった栗林地区を中心に釜石市内の小学校に配布し、併せて画面の電子ファイルは、漁火の会のメンバーが「つまぶちのかっぱ」を語る際にパワーポイントでスクリーン呈示し、子ども達が方言昔話の語りに親しみをもちもらうためのツールとしても活用した。

原作者：藤原直之

作成者：釜石漁火の会・藤原マチ子・大野眞男・竹田晃子・小島聡子

小学生に向けた前書き（表紙裏に記載）：

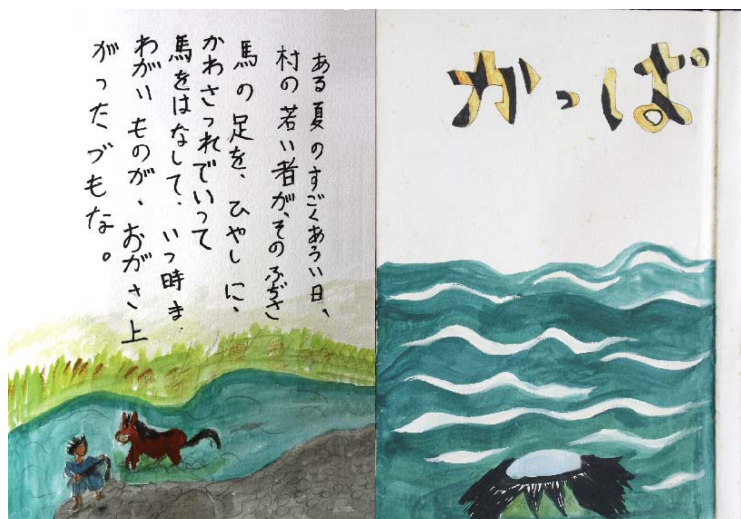
みなさんは、かっぱを見たことがありますか？ もちろん、ありませんよね。では、かっぱのお話を聞いたことがありますか？ 釜石にも、かっぱのお話がたくさんありました。この絵本は、栗林に住む藤原直之さんが、今から二十六年前の小学生時代に、近所に藤原熊男さんから聞いたかっぱのお話を、夏休みの宿題にまとめたものです。

笛吹峠から流れ出る鶴住居川に住んでいた一匹のかっぱのお話です。「つま淵」という深い淵に住んでいたそうです。淵というのは、川の流れが深くよどんだところで、昔から妖怪などが住んでいると考えられていました。

絵もすばらしいですが、ことばもおもしろく書かれています。近所のおじさんの語る栗林の方言をつかって、かっぱが馬を川にひきこむ恐ろしさ、かっぱを許したおじいさんの優しさ、そして二匹のかっぱの出会いが、生き生きと描き出されています。

みんなも、声に出して読んでみてください。わからないことばがあったら、先生や、お母さん、お父さん、おばあちゃん、おじいちゃんに聞いてみてください。栗林のことばで書いてありますが、自分の住んでいる地域のことばで語ってもおもしろいですよ。

おもしろいと思ったら、次は、みんなで地域に伝わる昔話を探してみませんか。釜石には、昔話を地域のことばで語って聞かせる、そんな語り部のみなさんたちもいらっしやいます。ふるさとに伝わることばの文化に触れることも、とても良い勉強になりますよ。



## II. 昔話等の口承活動の支援を通じた地域方言による言語文化活動の活性化

地域方言を使用する社会的場面を確実に次世代に残すため、方言が継承される培地として昔話等の口承的伝承を語る活動に継続して注目し、地域の言語文化活動の活性化を図った。具体的には、地域の昔話を語る団体（釜石市「漁火の会」等）の活動を支援するとともに、地域の子どもたちを対象とした昔話の語り等の伝承活動や地域方言による交流機会を設定して、地域の言語文化の次世代への継承を促進し、その活動の定着を図った。また、地域言語活動を行う同趣旨の団体間（釜石・八戸）の連携交流活動についても支援を行い、新たなメディアによるアフレコ体験ワークショップの開催等を通じて、地域の言語文化の世代間継承のチャンネルの拡大を図った。

### 1) 田老第一中学校方言劇「関口松太郎物語」の脚本方言訳支援

担当者：大野眞男・竹田晃子

実施形態：宮古市立田老第一中学校文化祭事業として生徒会執行部が取り組む演劇活動「関口松太郎物語」脚本の田老方言訳支援

日時：10月29日上演（9月14日・10月5日・10月12日・10月19日、打合せ及び調査）

場所：田老第一中学校

概要：関口松太郎氏は昭和の大津波直後の田老町長であり、被災から立ち上がるための第一歩の事業として防浪堤づくりを提案するが、困窮する村の財政状況からほとんどの村民が反対する中を、子孫の繁栄のためと説得し、ついに村を挙げて事業に着手するというストーリーである。

①9月14日の田老第一中学校「合同津波授業」として、昭和の大津波直後の郷土教育運動と田老方言に関する大野の講演を行った際に、中学校より方言劇を行いたい旨の相談を受けた。田老方言に関する授業と当初のシナリオは共通語で書かれていたが、田老らしさを前面に出したいという田老第一中学校の要望を受け、田老方言版作成の支援を請け負った。

②田老町にはまとまった方言集が存在しないため、昭和の大津波直後の時期に岩手全県下で取り組まれた郷土教育運動の報告書である「田老尋常高等小学校 郷土教育資料」を中心に、その他の利用可能な資料からの情報を加えて、見出し語989項目から成る二種の冊子『絆のことば—田老方言の単語帳—（共通語引き・五十音順）』（65頁）・『絆のことば—田老方言の単語帳—（方言引き・五十音順）』（69頁）を作成し、暫定的な形で利用可能な仮の田老方言集として、10月5日に生徒会執行部に参考資料として提供した。先々は、田老の方々によりこれらの冊子を増訂して、正式の田老方言集を作成することが次の目標となる。

③文化祭が迫っているため、生徒の自主的なシナリオ方言訳を一層支援するために、シナリオの方言試訳を竹田が続けて行った。地元のNPO「たちあがるぞ田老」を主宰する大棒秀一氏の協力を得て、10月12日に大野が田老方言緊急調査と方言試訳版シナリオのネイティブ・チェックを行い、その結果確定した方言訳シナリオを生徒会執行部に引き渡した。

その後、生徒会執行部の生徒たちにより、共通語を残す部分と方言で演ずる部分の自主的編集が行われた結果、最終的なシナリオが確定し、盛岡劇場グループによる演劇指導のもとに上演に向けた稽古が繰り返された。10月19日の全体稽古（下記写真参照）を経て、10月29日の文化祭での公演が行われた。来聴者はほとんど父兄と地域の方々であり、生徒たちが自分の言葉として話す田老方言を食い入るように聞き入っていたのが印象的であった。



## 2) 南部弁を語る事業「南部弁さみっと in 八戸 2016」開催

担当者：大野眞男・小島聡子・竹田晃子

実施形態：南部弁の日実行委員会・八戸市（八戸ポータル・ミュージアムはっち）主催、文化庁支援事業「発信！方言の魅力・かだるびゃ・かだるべし青森県の方言」（事務局：弘前学院大学）・文化庁支援事業「おらほ弁で語っぺしプロジェクト」共催、青森県教育委員会・八戸市教育委員会後援

日時：2015年12月5日 18:30～20:30

場所：八戸ポータル・ミュージアムはっち 2階シアター2

来聴者数：約120名

概要：八戸市により南部弁の日（12月3日）が定められたことを記念して開催される第4回「はっちがずっぱど南部弁」の第3部として開催した。本プロジェクトと同じく文化庁支援事業である「発信！方言の魅力・かだるびゃ・かだるべし青森県の方言」と連携して、北の南部弁である八戸市と南限の南部弁である釜石市の昔話の語り（釜石「漁火の会」による）、さらには津軽弁を聞き比べてもらうことによって、それぞれの方言の違い、言葉の味わい、昔話の内容の違い等について実感し、生活語としての方言の豊かさを体感するとともに、同じく東日本大震災による大津波の被災地同士が方言を通じて交流を深め、復興に向かって連携していくきっかけを作ることを目的として実施した。

プログラム（敬称略）：

- ①「南部藩領と津軽藩領の言語と文化の多様性」弘前学院大学・今村かほる
  - ②「百ぺん聞いて人を疑え」釜石・北村弘子
  - ③「福の神」下北・越前昌子
  - ④「逢わず沼」釜石・磯崎彬
  - ⑤「まんま喰（か）ね嫁こ」津軽・千葉涼子
  - ⑥「八戸童話会の歩み」八戸・柗谷伸夫
  - ⑦「米子と糠子」八戸・柗谷伸夫
  - ⑧「つまぶちの河童」釜石・藤原マチ子
  - ⑨「踊りこ踊った猫」三戸・久慈瑛子
  - ⑩「猿と蟹」津軽・三橋光子
  - ⑪「まんだだか小僧（こんじょ）」五戸・佐々木和子
- 司会進行：大野眞男・今村かほる

2016 正部家利達 第4回南部弁の日  
**はっちが・ずっぱど南部弁**  
 ~うん、これアよごあんすナ~

12月3日(土)  
 荻谷伸夫氏プロデュースによる、青森県南部弁・津軽弁・岩手県南部弁の語り部が一堂に会し、方言の魅力を探る

1) 小中学生による 南部弁でアフレコに挑戦。  
 アフレコの言葉とご一緒に挑戦に合わせて~  
 会場：1階はっちむらび  
 時間：13:00~15:00  
 入場料：無料

2) たくさんの方の方言を聞きあひましよう。  
 八戸市立南小学校(津軽)と全道による朗読「伝三郎 義経」上演  
 八戸市立南小学校(津軽)と全道による朗読「伝三郎 義経」上演  
 八戸市立南小学校(津軽)と全道による朗読「伝三郎 義経」上演  
 会場：1階はっちむらび  
 時間：15:30~17:00  
 入場料：無料

3) 南部弁サミット in 八戸2016  
 (青森県南部弁・津軽弁・下北弁・岩手県南部弁)  
 会場：2階ラウンジ2  
 時間：18:30~20:30  
 入場料：無料(観覧券あり)

おらほ弁で昔話を語っぺし  
 南部弁サミット in 釜石  
 ・プログラム・  
 ★ばあば、かでて (漁火の会とお孫さん達との昔話語り)  
 ★釜石あの日あの時甚句(藤につたスズ)  
 ★漁火の会による全員語り  
 ★おらほ弁「金太郎」  
 ★青森県からのゲスト (荻谷伸夫さん・佐々木和子さんほか)  
 ★一盛岡からのゲスト (田口友美さん)  
 ★おらほ弁ラジオ体操  
 ★一遠野からのゲスト (菊池栄子さん)

日時：2017年1月21日(土)  
 14:00~16:30(開場13:30)  
 場所：釜石スマイルPIT (釜石情報交流センター)

3) 釜石弁を語る事業「おらほ弁で昔話を語っぺし・南部弁サミット in 釜石」開催

担当者：大野眞男・小島聡子・竹田晃子

実施形態：文化庁支援事業「おらほ弁で語っぺしプロジェクト」主催、釜石市教育委員会・文化庁支援事業「発信！方言の魅力・かだるびゃ・かだるべし青森県の方言」（事務局：弘前学院大学）共催

日時：2015年1月21日 14:00~16:30

場所：釜石情報交流センター・釜石スマイルPIT

来聴者数：約60名

概要：釜石の地域の言葉で日常生活を送ることの楽しさ・面白さについて、方言で昔話を語る「漁火の会」による語りを通じて気づいてもらうこと、方言が価値の低い言葉ではなく、自分たちの心情を最も忠実に反映できる言葉であって、いろいろな社会的場面で地域の連帯的感情を表現できる言葉であること等について、子どもも含めた釜石地域の方々に理解を深めていただき、方言が次世代に継承されるための社会的認識の改善を促進することを目的に実施した。次世代への継承という観点から、昔話を語る「漁火の会」メンバーがお孫さん達と一緒に昔話を語る場面を設定した。津波の被災を後世に伝える甚句の披露も行った。また、本プロジェクトと同じく文化庁支援事業である「発信！方言の魅力・かだるびゃ・かだるべし青森県の方言」（事務局：弘前学院大学）と連携して、北の南部弁である八戸や、さらに津軽の昔話語り（八戸・津軽の語り手による）を聞き比べてもらうことによって、地域の方言の味わい、地域による言葉の違い等について実感し、生活語としての方言の豊かさを体感するとともに、同じく東日本大震災による大津波の被災地同士が方言を通じて交流を深め、復興に向かって連携していくきっかけを作ることをも目的として実施した。加えて、岩手県内の公共放送で地域方言を素材にしたラジオ番組を展開しているパーソナリティーの方の参加を得て、自作の方言なまり歌を披露していただいた。最後に、「漁火の会」の須知ナヨ氏の父親であり、遠野の語り部の鈴木サツ氏（故人）・正部家ミヤ氏・菊池ヤヨ氏の父親でもある菊池力松氏の思い出を、須知ナヨ氏、娘の安部三枝氏、姪の菊池栄子氏が語りあう場を設定した。

プログラム（敬称略・「漁火の会」メンバー名省略）

- ①漁火の会とお孫さんによる語り「ばあば、かでて！」

- ②釜石、あの日あの時甚句
- ③漁火の会による釜石の昔話の語り
- ④おらほ弁「金太郎」
- ⑤八戸・津軽の昔話の語り（柎谷伸夫・佐々木和子・千葉涼子・三橋光子）
- ⑥田口友善氏による自作の方言なまり歌
- ⑦おらほ弁ラジオ体操
- ⑧遠野・菊池力松一族語り（須知ナヨ・菊池栄子・安部三枝）

「金太郎」の歌を漁火の会バージョンのおらほ弁替え歌で楽しませるメンバーら



## 民話の世界 観客魅了

青森県のゲストは、江戸時代に南部藩の領域で、岩手とは、南部弁仲間の関係にある「八戸童話会」メンバーと、津軽弁で民話を語る「北の会」メンバーの計4人。それぞれに特徴あ

る方言で地元の昔話を聞かせた。釜石・遠野の昔話の締め言葉「どんどほはれは、八戸では「どんどほれ」、津軽弁では「どちちばれ」と言うそう。他にも地域独特の言葉が飛び出し、方言の魅力が飛び出し、方

北の会の千葉涼子さん(66)「弘前市」は私たちがとにかく津軽弁が好きで、旅行しても漁火の会は新年になんだ「十二支の始まり」の話や釜石、遠野に伝わる民話を地元の方で語った。釜石の話は「長え長え綱つこ(岡石)」、釜石のお産婆さん(東前)など4話。同会がこの日初めて披露する演目もあり、約50人の観客は興味をそそられながら物語の世界に引き込まれた。

NHK盛岡放送局のラジオ番組「まじえ5時のパソナリティー」を務めるシンカーソン(76)は、「まめこの話」「そば屋のまじえ」などを披露。話に触れる機会も減ったので貴重な時間だった「菊池力松一族」と振り返った。

### 南部弁さみっとin釜石

「おらほ弁で昔話を語っぺし」南部弁さみっとin釜石は21日、釜石市大町の情報交流センター釜石PITで開かれた。被災地の方言の保存・継承、方言の力を活用した復興への取り組みを支援することで、方言の再興や地域コミュニティ再生につなげる文化庁の事業で、3年目の開催。岩手大が事務局を務める「おらほ弁で語っぺしプロジェクト」が主催した。



盛岡弁で楽しい歌のステージを届けた田口友善さん

# 方言の力 復興に生かす

「おらほ弁で昔話を語っぺし」

方言で地元の昔話を聞かせた。釜石・遠野の昔話の締め言葉「どんどほはれは、八戸では「どんどほれ」、津軽弁では「どちちばれ」と言うそう。他にも地域独特の言葉が飛び出し、方言の魅力が飛び出し、方

クライター田口友善さんの語り術を見せ、観客は「クラリネットこわしちゃった」の盛岡弁版を弾き語りして披露。「どうしよう」と操(釜石バージョン)で体を動かすなど、全身で方言の素晴らしさを感じた。只越町の復興住宅に暮らす大河内静子さん(65)は「方言は自分も使った覚えが懐かしい。初めて聞く話ばかりで面白かった。今は方言や昔話に触れる機会も減ったので貴重な時間だった」と振り返った。



遠野の昔話語りの手「菊池力松一族」について話す須知ナヨさん(中左)と菊池栄子さん(中右)

4) 子どもたちに昔話を語り聞かせる事業「おらほ弁で語っぺし・小学校編」

担当者：大野眞男、小島聡子、竹田晃子

実施形態：文化庁支援事業「おらほ弁で語っぺしプロジェクト」主催、釜石市教育委員会共催

日時：2016年11月30日・2016年12月21日・2017年1月10日・2017年1月12日（4回実施）

場所：釜石市立白山小学校・釜石市立栗林小学校・甲子学童育生クラブ・双葉学童育生クラブ

対象児童数：約170名

概要：地域に伝承される昔話は従来から方言で語られ続けてきており、共通語で語ることが最も馴染まない言語活動領域である。本プロジェクトでは、方言を次世代に継承してもらうための効果的な場面として昔話の語りという魅力ある地域素材に注目して、漁火の会の語り手との連携のもとに、以下の日程で釜石市内の公立小学校を訪問して、生徒たちに方言による昔話の語り聞かせを行った。また、語り聞かせに並行して、物語の要所要所においてパワーポイントによるイラスト呈示を行い、子ども達の注意力を惹きつけるような工夫を行った結果、とくに低学年において、物語の展開や方言に対する理解が高まった。





白山小学校と栗林小学校で生徒を対象に実施した事後アンケートの結果は以下の通りである（サンプル数 93 名、小数点一桁以下・四捨五入、自由記述欄は割愛、[]内の数字は昨年度、質問 6 は本年度新設）。これらのデータから、釜石の小学生たちは、自分自身はほとんど方言を使うことはないが、方言に対して興味を持ち、方言で語られる昔話の世界を楽しんでいることがうかがわれる。

また、全項目で昨年度と比較して相対的に良い評価を表す数字となっている。これは、昔話の語りに加えて、パワーポイントによるイラスト呈示を行ったことで、子ども達の語りへの関心を掻き立てたこと、スクリーンへのイラスト呈示が小学生に好評であったことを物語っている。

①今日のような昔話を、また聞いてみたいと思いますか？

また聞きたい 94.7% [87.5%]    どちらかという、また聞きたい 5.3% [10.4%]

あまり聞きたくない 0% [0%]    聞きたくない 0% [0%]

②釜石のことばや方言は、おもしろいと思いましたが？

おもしろいと思った 85.1% [77.1%]

どちらかという、おもしろいと思った 14.9% [20.8%]

どちらかという、おもしろくなかった 0% [2.1%]    おもしろくなかった 0% [0%]

③自分でも、釜石のことばや方言を使ってみたいと思いましたが？

方言を使ってみたい 64.9% [50%]    どちらかといえば、使ってみたい 26.6% [31.3%]

どちらかという、使いたくない 5.3% [10.4%]    使いたくない 3.2% [8.3%]

④自分でも昔話を語ってみたいと思いましたが？

語ってみたい [46.8%]    どちらかといえば、語ってみたい 44.7% [37.5%]

どちらかという、語りたくない 8.5% [18.8%]    語りたくない 0% [12.5%]

⑤ふだん、釜石のことばや方言で話すことがありますか？

方言で話すことがある 8.5% [8.3%]    ときどき方言で話すことがある 17.0% [8.3%]

あまり話すことはない 20.2% [20.8%]    ほとんど話すことはない 53.2% [62.5%]

⑥スクリーンに映し出した絵は、おもしろいと思いましたが？（新設質問項目）

おもしろいと思った 92.6%    どちらかという、おもしろいと思った 6.4%

どちらかという、おもしろくなかった 0%    おもしろくなかった 0%

## 5) 「方言アフレコ体験ワークショップ in 八戸」開催（再委託事業）

担当者：大野眞男・小島聡子・竹田晃子

実施形態：文化庁支援事業「おらほ弁で語っぺしプロジェクト」主催、柗谷伸夫（八戸市公民館）

・北村弘子（釜石漁火の会）方言監修、株式会社クリーク・アンド・リバー社実施事務局

日時：2016年12月3日 13:00～15:00

場所：八戸市ポータルミュージアム はっち はっち広場

参加児童生徒数：小学生～高校生 14名

概要：過年度クリーク・アンド・リバー社が作成し、文化庁HPで既に公開している釜石版アフレコ・コンテンツ「方言アフレコ体験教室」を活用し、方言で昔話を語る「漁火の会」とも連携した方言アフレコ体験ワークショップを地域の子どもたちを対象に開催することで、新たなネットワーク・メディアを通じた地域の言語文化の次世代への継承を促進した。なお、このワークショップは、「おらほ弁で語っぺしプロジェクト」事業の一環として、アフレコ関係コン

テンツの作成・運営に卓越した技術・能力を有するクリーク・アンド・リバー社に再委託して実施したものである。

おらほ弁で語っぺしプロジェクトが共催として企画・参加する「はっちがずっぽど南部弁」と連携して南部弁の日（12月3日）に八戸市で開催し、岩手県域から青森県域にかけての広大な南部領の南端・釜石市と北端・八戸市の方言の違いを、八戸市内の子ども達に気づき楽しんでもらうことを目的としてアフレコ体験ワークショップを開催した。

プロの声優を講師として招いての本格的なアフレコ体験を通して、参加者にはリラックスした環境で楽しみながら方言に触れ、その関心を高めてもらうことで、被災地方言の保存と継承のきっかけとすることを目的として実施した。

運営に際してはクリーク・アンド・リバー社関係者のみならず、本プロジェクトメンバー（大野・小島・竹田）が積極的に関わり、地元八戸市公民館の榎谷館長、釜石漁火の会の協力をいただくことができ、「おらほ弁で語っぺしプロジェクト」事業として一体感を持った運営体制を組むことができた。また、オープンスペースで開催したために、お子さん方の御家族の応援を得ることもでき、和やかな雰囲気での終始することができた。

ワークショップの詳細については、クリーク・エンド・リバー社提出の資料（実施報告書・アンケート集計結果）をご参照いただきたい。

平成 28 年度文化庁事業「おらほ弁で語っぺし」実施編

## 方言アフレコ体験ワークショップ

参加無料

みなさんの地元である青森県八戸市の言葉に親しむ、方言アフレコ体験ワークショップを実施します。

プロの声優さんと一緒に地元の言葉でアフレコ体験をしてみませんか？ 小学校 3 年生以上の方なら、演技の経験がなくても大丈夫。どなたでも参加可能です。地元の言葉でのアフレコ体験にチャレンジしてみたい方ももちろん、役者や声優に憧れている皆さんの応募もお待ちしています。

開催日、会場、講師、申し込み方法などは、下記のとおりです。

※この事業は、方言アフレコ体験ワークショップを実施することを通して広く方言への関心を高め、方言の継承につなげてもらうことを目的としています。平成 28 年度文化庁事業「おらほ弁で語っぺし」実施編の一環として実施するものです。

平成 28 年 12 月 3 日 (土) 13:00~15:30  
 場所：八戸ポータルミュージアム はっち 1階はっちひろば  
 〒031-0002 青森県八戸市三丁目 11-1

講師：北 森つ希 (エッセイスト)  
 榎谷 伸久 (八戸市公民館館長)  
 釜石で伝統を語り伝える漁火の会

募集人数：20 名 ※原則として小学校 3 年生以上  
 申し込み締め切り：平成 28 年 11 月 24 日 (木) ※定員に達し次第締め切ります。  
 申し込み・問い合わせ先：八戸市公民館 Tel:0178-45-1511 Fax:0178-44-7176

参加希望の方は申込書に記入の上、平成 28 年 11 月 24 日 (木) までに八戸市公民館に FAX にてお申し込みください。  
 お返書でも申し込みます。

▲ FAX: 0178-44-7176

申込書 ( ) 「方言アフレコ体験ワークショップ」八戸編 参加申込書 11月24日(木) 締切

〒 \_\_\_\_\_ 市 \_\_\_\_\_ 区 \_\_\_\_\_ 丁目 \_\_\_\_\_ 番 \_\_\_\_\_ 号 \_\_\_\_\_

氏名 \_\_\_\_\_ 性別 \_\_\_\_\_ 年齢 \_\_\_\_\_

電話番号 \_\_\_\_\_ 住所 \_\_\_\_\_

〒 \_\_\_\_\_ 市 \_\_\_\_\_ 区 \_\_\_\_\_ 丁目 \_\_\_\_\_ 番 \_\_\_\_\_ 号 \_\_\_\_\_

「方言アフレコ体験ワークショップ」八戸」ポスター

平成28年度 被災地における方言の活性化支援事業

岩手大学 主催

「おらほ弁で語っぺしプロジェクト」

方言アフレコ体験ワークショップ in 八戸

実施報告書

平成28年12月20日

株式会社クリーク・アンド・リバー社

## 方言アフレコ体験ワークショップの実施

### 1 概要と目的

本ワークショップは岩手大学の平成 28 年度文化庁支援事業「おらほ弁で語っぺし・定着編」の一環として実施の一環として、岩手大学より再委託を受け、株式会社クリーク・アンド・リバー社が実施したものである。

再委託元の実施する「南部弁の日」と連携して、八戸市内にて小学校高学年～高校生くらいの子ども 20 名程度を対象として、方言でアフレコ（アニメ等で映像に合わせて音声等を吹き込むこと）を体験するワークショップを実施する。

ワークショップは、文化庁特設 Web サイト「方言アフレコ体験教室」にて公開中の動画と脚本を活用し、プロの声優を講師として招いての本格的なアフレコ体験に、全員参加のゲームを組み込んだウォーミングアップを加えることで、参加者にはリラックスした環境で楽しみながら方言に触れ、その関心を高めてもらうことで、被災地方言の保存と継承のきっかけとすることを目的とした。

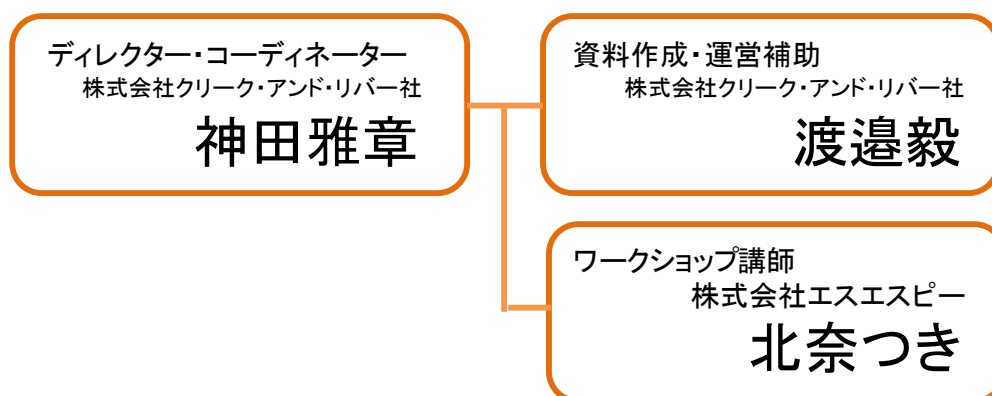
「南部弁の日」との連携を意識し、地元八戸の言葉を体験させるにとどまらず、釜石の方言もあわせて体験させることで、同じ南部弁でも地域によって差があることに気付かせるカリキュラムとした。

さらに、ワークショップの様子を一般に公開して、地域の皆様にも子どもが楽しみながら方言に触れる様子を見ていただくことで、地域の方言保存・継承の活動における新たな手法を知り、活動の一助としていただくこともねらった。

### 2 ワークショップの日時と開催場所

12月3日（土） 13:00～15:00 会場：八戸市ポータルミュージアム はっち

### 3 実施体制



※方言指導者等は、岩手大学にて手配

### 4 実施内容詳細

平成 28 年度文化庁支援事業「おらほ弁で語っぺし・定着編」 方言アフレコ体験ワークショップ	
日時	平成 26 年 12 月 3 日（土） 13：00～15：00
開催地	八戸市ポータルミュージアム はっち はっち広場
講師	アフレコ：北奈つき 方言：榎谷 伸男 北村 弘子（漁火の会）
スタッフ	主催者：大野 眞男（岩手大学） ディレクター：神田 雅章（C&R 社） 運営補助：渡邊 毅（C&R 社）
内容	12：30～ <b>開場</b> ・参加者受付 ・講師による参加者へのヒアリング・フォローアップ  13：00～ <b>ワークショップ開始</b> ・主催者挨拶 ・講師自己紹介 ・ガイダンス  13：05～ <b>ウォーミングアップ実施</b>  16：25～ <b>共通語アフレコ体験</b> ・共通語版の視聴（通し） ・講師による共通語アフレコ実演（一部抜粋） ・実演部分の全員音読

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアで役を決めてのアフレコ練習+助言 ※巡回しながら助言</li> <li>・ペアでリレーしてのアフレコ発表会（共通語）+感想</li> </ul>
13:50～	<p><b>方言アフレコ体験</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者を2グループに分け、それぞれ八戸方言または 釜石方言のどちらか一方を練習し、アフレコ発表会を実施。</li> </ul>
14:45～	<p><b>まとめ</b></p>

#### 5 ワークショップ アンケート集計結果

方言アフレコ体験ワークショップ アンケート集計結果 参照。

平成28年度 被災地における方言の活性化支援事業

岩手大学 主催

「おらほ弁で語っぺしプロジェクト」

方言アフレコ体験ワークショップ in 八戸

別紙 方言アフレコ体験ワークショップ アンケート集計結果

平成28年12月20日

株式会社クリーク・アンド・リバー社

## ■アンケート集計結果

ワークショップ実施日時：平成27年12月3日（土） 13：00～15：00

場所：八戸市ポータルミュージアム はっち

参加人数：14名

アンケート回収：8名

### 1. 本日のワークショップはいかがでしたか

とてもよかった	6人
よかった	2人
あまりよくなかった	0人
よくなかった	0人

### 2. 本日のワークショップの時間について

長い	1人
やや長い	0人
ちょうど良い	7人
やや短い	0人
短い	0人

### 3. 本日のワークショップでよかった点

楽しめてすごくよかった。
すごく楽しめるところがよかった。
方言を覚えられたので、日常でも使ってみたい。
八戸の方言について知るいい機会になった。
いろんな所の方言の言い方や意味を知ることができてとてもよかったと思う。
プロの方と一緒にやったのはよかったと思う。

### 4. 本日のワークショップでの改善点

特になし(7名)
人に見られるのは、緊張するので変えたほうがいい。



5. ワークショップに参加して、方言に興味は持てましたか

とても興味を持てた	4人
興味を持てた	4人
あまり興味を持てなかった	0人
興味を持てなかった	0人

6. 方言についての思いとしてあてはまるもの

もっと方言を学びたい	4人
方言はむずかしい	4人
方言の印象がよくなった	5人
方言の印象が悪くなった	0人
方言は大切なもの	5人
方言のほうthat気持ちを表しやすい	5人
方言のほうthat気持ちを表しにくい	0人
方言を使うのは楽しい	5人
方言をなくしたくない	2人
方言はなくなってもしかたない	0人
方言を学校でも扱ってほしい	2人
方言を聞ける場がもっとほしい	4人
おなじ南部弁でも地域によって違うことがわかった	6人

オープンスペースでワークショップを実施したことにより、参加者に若干の緊張があったものの、ワークショップを通じて方言を発話したことにより、半数以上が「方言の印象が良くなった」「方言の方が気持ちを表しやすい」「方言を使うのは楽しい」と回答するなど、方言に親しみを感じてもらうことができた。

また、「方言はむずかしい」「もっと方言を学びたい」という意欲的な回答も半数に達した。

特に「南部弁の日」イベントの特別な取り組みとして、地元八戸の方言だけでなく、釜石地域の方言にも触れてもらったことで、「おなじ南部弁でも地域によって違うことが分かった」と、方言の多様性に気付いてもらうことができた。

方言を楽しみながら発話することができるワークショップ等の機会を、今後も様々な形で多くの子供達に提供していくべきである。